芥川龍之介

片岡良一 著

国語と文学の教室

福村書店

芥川龍之介

片岡良一著

国語と文学の教室

福村書店

福村書店

著者の希望により検印廃止
1952年5月15日　印刷
1952年5月25日　發行

国語と文学の教室
芥川龍之介
定価百三十円

著者　片岡良一

発行者　福村保　東京都文京区真砂町三六
印刷者　山田一雄　東京都青梅市根ヶ布三八五
発行所　株式會社福村書店　東京都文京区真砂町三六
電話(85)六六〇・四六六四番　振替東京七八三一三

はしがき

もうだいぶ前、廣津和郎が、文学は立札のようなものであってはならない、という意味のことを書きました。

「この土手にのべるべからず」――土手の向こう側にあぶなく深い淵などが口をあいているような場合、こういう立札も必要でしょうが、その深淵に落ちこんでしまったものに対しては、立札はいつでも脊中を向けています。万一そうでないとしても、その土手にはい上がれば助かるのに、「この土手にのぼるべからず」ではどうにも取りつきばがないでしょう。

ところが、人生というものは漫々と水をたゝえた深い淵のようなものです。そこに友人とボートを浮かべる楽しさもあるかわり、怖ろしいうずまきなどもところどころにあるでしょう。そうして人間は生まれた時からいやおうなくその深淵のような人生

のただ中に置かれているのです。「この土手にのぼるべからず」ではなくて、その深淵そのものの中に生きるにはどうしたらよいのかを教えてくれるものが必要なわけです。

文学というものは、そういう深淵に浮かんでいる人々の、生の記録だといってもいいような性質を持っています。ボート遊びの楽しさ、うずまきの怖ろしさ、それにまきこまれたものの苦しみ――そういうものの、いろいろを知らせることによって、その深淵でどのように生きたらいいのかを、いろいろに考えさせたり自然にさとらせたりするものです。つまり立札が深淵に近よらせまいとするものであるのに対して、文学はその深淵の中から出発しようとする性質を持つものなのです。そういう性質が、もう一つのだいじなはたらき（機能）である感動に酔わせるということととけあったところに、酔わせながら覚ます（人生を知らせる）という、文学の微妙なはたらき（作用）が生まれてくるのです。

芥川龍之介の文学はどちらかといえばボート遊びの楽しさをうたったものではなく、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

うずをいやがったりそれにまきこまれて苦しがったりしているようなものです。はじめからそういうものと思ってこれに接することが必要でしょう。この本は、できるだけ多くの作品解説を積み重ねることによって、そういう芥川文学のいろいろな側面をできるだけ明らかにしようとしたものです。いくらかむずかしいようなところがあるかも知れませんが、ふんばつして読んでいただけたらうれしいと思います。

一九五二年　四月

片岡良一

片岡良一先生

一八九七年一月、神奈川県茅ヶ崎市にお生まれになった先生は、一九二五年、東京大学国文学科を卒業されました。現在、法政大学文学部教授として、日本近代文学を専攻されております。

先生の御住所

神奈川県茅ヶ崎市甘沼二六七番地

先生のお書きになった本

「近代日本の作家と作品」（岩波書店）、「近代派文学の輪廓」（白楊社）、「近代日本文学教室」（ジープ社）

もくじ

はしがき……一
夜明け……一
「鼻」と「芋粥」
わびしい風景……二
「手巾」と「忠義」「枯野抄」と「羅生門」
「運」「孤独地獄」「ひょっとこ」など
背景……三五
家　時代　夏目漱石
本の中の世界……五六
森鷗外「奉教人の死」と「きりしとほろ上人伝」
「戯作三昧」と「地獄変」
「野呂松人形」「秋山図」など

本からの脱出……八三
「三つの宝」、その他の童話
「蜜柑」と「おぎん」
「保吉物」と「大導寺信輔の半生」
「一塊の土」その他と「トロッコ」
「藪の中」と「報恩記」
刃のこぼれた剣……一〇八
新時代「玄鶴山房」
「年末の一日」「蜃気楼」など
「河童」と「或阿呆の一生」
敗北の文学……一三四
年譜……一四三

そうてい・庫田　叡
カット・田中彌壯

夜明け

一九一六年（大正五年）二月の第四次新思潮創刊号に、芥川龍之介の「鼻」という小説が発表されました。

池の尾の禅智内供の鼻は、長さが五六寸もあって、顔のまん中から顎の下まで、細長い腸詰めのようにぶらりとたれ下っていました。

もう五十を越えた坊さんである内供は、そんな年で、然も坊さんである自分が、鼻のことなど気にしていると思われるのがいやなので、さほど気にならないような顔をしていましたが、内心では談話の間に鼻という語が出るのをさえおそれるほど神経質になっていました。第一、誰かに長い棒でそのたれ下っている鼻を持上げていてもらわねば、食事することも出來ないのですから、不便でしかたがありません。当然彼はいろいろと鼻を短く見せる工夫やそれを短くする療治をしてみたのですが、一向によい方法も見つかりませんでした。

ところが、ある年の秋、弟子の一人がきいて来た療法を試みてみますと、ふしぎにもそれが普通の鉤鼻とあまり変りがないほど行儀よくまとまったものになりました。内供はむろん大喜びで、「こうなればもう誰もわらうものはないにちがいない」と思いました。

が、意外なことにそれは内供の思いちがいで、人々は妙な顔をして彼の短くなった鼻ばかり眺めている上、ともすればくすくすと笑い出すのです。それは内供の長い間の不幸が取りのぞかれてしまったのを何か物足りなく思うような意地の悪い笑い方でありましたので、内供は自然ふきげんになるのでしたが、そうなればまた人々はその内供のふきげんを悪口や蔭言の種にするのでした。

内供はなまじ鼻の短くなったのが恨めしくなりました。

と、或る冷たい風の吹いた晩、鼻がむずがゆく水気を含んだようになったと思うと、いつの間にかもとのように長くなってしまいました。翌朝それに気づいた内供は、前に鼻が短くなった時と同じような、はればれした心もちになりました。彼はその長い鼻をあけ方の秋風にぶらつかせながら、心ひそかに「こうなればもう誰も笑うものはないにちがいない」と思うのでした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

「鼻」という作品には大体こんなことが書かれています。これは昔の「今昔物語」や「宇治拾遺物語」に出ている話を種にして龍之介好みに作りかえたものでしたが、これを見たかれの先生夏目漱石がひじょうにほめたのです。

あなたのものは大変面白いと思ひます。落着きがあって巫山戯てゐなくって自然其侭の可笑味がおっとり出てゐる所に上品な趣があります。夫から材料が非常に新しいのが眼につきます。文章が要領を得て能く整ってゐます。敬服しました。あゝいふものを是から二三十並べて御覧なさい文壇で類のない作家になれます。」（書簡）

こういう漱石の推奨が縁となって、この作はやはり漱石の弟子であった鈴木三重吉の編集顧問をしていた雑誌「新小説」の五月号にあらためてもう一度発表されることになり、ついで同じ新小説の九月号に新しい作品「芋粥」が発表されることになったのでした。これもまた「今昔物語」と「宇治拾遺物語」とにのっている話を書きかえたもので、はたらきのない好人物であることのために、周囲のものからしじゅう馬鹿にされたりいたずらされたりしている五位の男が、芋粥を腹いっぱい食べたいという

のをたゞ一つの希望としているということを知った利仁（としひと）という貴人が、かれをわざわざ京都から敦賀（つるが）までつれて行って芋粥をごちそうしたのでしたが、あまりにおびただしい芋粥を見せられた五位は、それを見ただけでげんなりしてしまって、いくらも食べることができなかった、そしてかれは芋粥を腹いっぱい食べたいという希望を楽しむことのできたそれまでのじぶんを今のじぶんよりかえって幸福だったと思うようになってしまった、ということが書かれています。つまり希望はそれを希望として夢に描いている間だけがしあわせなので、それが実現されてみれば一向つまらないものだといういわゆる幻滅（げんめつ）の悲哀（ひあい）を描いたもので、これは作者が少しかたくなりすぎて「鼻」のように軽妙にはゆきませんでしたけれど、それにもかかわらず「鼻」にひきつづいてこの作もまた一般には評判がよく、そのため作者はそれから間もなくそのころの作家たちにとっての檜舞台であった「中央公論」にその作を発表することができるようになったのでした。したがってこの「鼻」と「芋粥」とが作者芥川龍之介にとっての出世作であったことになるのでした。

芥川が直接漱石と知りあうようになってから、こうしてかれが文壇の花形作者となるまでの間には、わずかに数か月の日数しかたっていませんでした。それは当時の文壇でもっともはなばなしい進出ぶりだといわれたものですし、作者自身も遺稿となった「或阿呆の一生」（一九二七年）の中の「夜明け」の章に、その時のことを追懐して、周囲のものが「いづれも薔薇色に染まり出した」とか、「彼の眞上に星が一つ輝いてゐた」とか書いています。まことにめでたい「夜明け」であったわけなのですが、それにしては、これらの作品はまたなんというわびしい世界を描いたものであったことでしょう。

夏目漱石が「鼻」について書いているように、これらの作品はいずれも一応はおもしろくおかしい話を取り扱ったものになっています。もとのように長くなってしまった鼻を秋風に吹かせながらぶらぶらさせたなどというところをみると、漱石の言葉よりもっと強く、作者はかなりふざけているとさえいえましょう。そういう点は「芋粥」の場合も同じことなので、おとなしくおどおどした五位が、利仁にさそわれて、

京都からはるばる遠い敦賀までの道中を、粥が食べたい一心でこわごわたどって行きながら、さていざとなると丸太のような山の芋の山やそれを切りこんだ大釜の粥に圧倒されて、もう食欲がなくなってしまったなどという話が、こっけいでないことはありませんし、後でもう一度触れるように、そういうおかしみも明らかに作者の意図したものであったのでした。

けれども、そういうおかしみの底にちょっとくぐると、「芋粥」の話にはすぐにみじめさが感じられるでしょう。たかだか山の芋を甘蔓の汁の中に切りこんで煮た程度のものを腹いっぱい食べることを、一生の願いとする人間のしがなさ。しかもそのしがない望みを達するためには、「往来の旅人が盗賊の為に殺されたと云ふ噂さへ」ある「物騒な」道を、とぼとぼと馬を駆って遠く敦賀まで行くというほどの、おそろしい困難をしのがねばならなかったのです。そうして、おそれたり「べそ」を掻かないばかりになったりしながらかろうじてその困難をしのいで、ようやくその目的を達してみると、それがもう喜ばしいことでもなんでもない、たゞ幻滅の悲哀を感じさせるだ

けのものでしかなかったというのですから、これはもう五位のような人間のすむ人生の荒涼たるわびしさを語る作品だということにならざるを得ないではありませんか。夢でも見ているよりほかに喜びなどあり得ない人間の生活だ——そう考えているのだと思うと、この作に示された作者の笑いには、苦い絶望の裏打ちが感じられることになります。

そういう点でもまた「鼻」の場合も大体似たものになっているのでした。この作でまず目につくのは、内供の鼻がせっかくあたりまえのものになったのに、それをすなおにかれと一しょに喜んでやれない周囲の人々の意地悪さです。それはひとのしあわせになるのを喜ばぬ、不幸にゆがめられた神経——一種のエゴイズムのしわざなのですが、そういう周囲の人々のケチな意地悪さが、せっかく望みを達してしあわせになった内供に、何か針のむしろにでもすわっているような、気もちの悪い落ち着かなさを感じさせてしあわせになったことをかえって不幸であるように思わせているのです。そういう理由から、せっかく希望が達せられてもそれが一向喜びになり得なかったと

いうことを書いている点では、これは「芋粥」とたいへんよく似た作品であったということにもなりましょう。そうして希望が達せられても一向しあわせであり得ないとすれば、希望がどうのこうのと考えることなどなんの意味もないことになってしまいます。長い間の苦労の末鼻が短くなったのを喜んだ内供が、「こうなればもうだれもわらうものはないにちがいない」と思っていたのを、後にまた鼻が長くぶらんとたれ下がってしまった時の喜びようと比較して見てください。後の場合にもまたかれは「こうなればもう誰も笑うものはないにちがいない」と思って喜んでいるのですから、これはもう希望など達せられようと、どうなろうと、結局人生は同じように頼りなくあじけないものなのだということを、感じさせるだけのことになりましょう。たれ下がった長い鼻を冷たい秋風にぶらつかせるという内供のこっけいなすがたは、だから、そう考えて人生をあきらめてしまったものも、どうにもならぬ不幸の中にとゞまっている悲しいすがただということになるのです。

が、それは一方からいえば、この作に描かれた内供の、あまりにも自分のない——

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo